ヨゼフ会便り

発行者　ヨゼフ会　横浜市中区山手町 44 番地 カトリック山手教会内
第 41 号　　2021 年 10 月 2 日発行

¶神との出会いの中で

助祭　水上 健次

４月２５日に出身の山手教会にて助祭叙階のお恵みを頂いたアウグスティヌス･水上健次(みずかみけんじ)です。山手教会ヨゼフ会の皆様には、日頃からのお祈りとご支援を感謝申上げます。今年は、出身教会の山手教会で神学院生活最後の司牧実習を助祭として奉仕させて頂いております。

ヨゼフ会の皆様とは長いお付き合いになります。私が受洗した２５年前はヨゼフ会の重鎮の皆様はそれこそ社会的身分の高い、名刺には肩書きが所狭しと書き記されている方の集りであったと思っており、付き合いにくいなと感じ、当初は近寄り難い大人達との印象が強かったことを思い出します。青年会として活動をしていると、ヨゼフ会の集会に呼び出しが掛かることもたびたびでした。当時は、みこころ幼稚園の園舎をお借りし、園児達の座る小さな椅子に山手教会を支える重鎮方が円になって座っているのがなんとも微笑ましく､リラックスしたものです。

会議が終わると打ち解けて色々な話をさせて頂きました。平の会社員だったわたしは、社会人生活では絶対にお近づきになれないような社長や公務員、大学の先生の方々が、まるで友達のように接してくださったことがなんとも嬉しくて、教会っていいところだなと思ったものです。そこには山手教会を良くしよう、福音宣教をしっかり行って行こうとの思いが伝わってきたものです。みなさん毎週教会に来るのが嬉しそうで、そんな気持が山手教会を活性化していたように思い出します。

また生意気だったわたしは、青年会に対する要望が日増しに多くなる当時の現状に対して、広報やまてに意見投稿したところ、そのまま一面に掲載されて反響を呼んだこともあります。でもそんな投稿に対してもヨゼフ会の皆様は耳を傾けてくださり、納得させられる大人の対応を学んだことも忘れられません。みなさん何かの役に立ちたい。それが神の国の建設に繋がるのだという思いが伝わってきたものでした。思えば学ぶことばかりの駆け出しの青年信徒時代でありました。

教会に行けば誰かに会える。これはわたしが大切にしている山手教会の最初の教えです。教会はキリストによって呼び集められ、主の食卓を囲み、神の言葉に耳を傾け、感謝を捧げ、御聖体によってキリ

ストと一つになるところです。そこにはキリストとの出会いがあります。キリストと出会ったわたしたちは、ミサで派遣されキリストの福音を伝えずにはいられない衝動に駆られます。しかし人は弱いものですから時間がたつに連れてキリストから心が離れてしまうものです。神から心が離れてしまうことを罪と言います。ですからわたしたちは毎週ミサに与り、キリストと出会う必要があるのです。出会いは一度きりではありません。人生の中で何度も何度もキリストと出会い、その度に強められていくものです。福音宣教は実体験に基づくことが大切です。聖書に書いてあることだけを伝えても、こころに響くことはありません。自分が聖書を読んでどう感じたのか、そこで自分はどのように神と出会ったのかを自分の言葉で伝えることが大切です。上手に話す必要はありません。綺麗な言葉を聞きたいのであれば注釈書を読めばいいのです。

神学院生活最終学年になりました。入学当初、水上は生活面では大丈夫そうだけど、あの歳での哲学と神学の勉強はついていけるか心配だと囁かれたものです。でもこの歳で学ばせて頂けることが喜びであり、また日本を代表する哲学者・神学者である司教、神父、講師陣から講義を受けられるという贅沢な環境も嬉しくて、全ての講義ノートは大切な宝物であります。神学院生活も信徒の皆様の献金により不自由なく過ごさせていただいております。改めて感謝申上げます。わたしたちに続く新しい神学生のためにもお祈りください。

キリストはいつもわたしたちが気がつくのを待っておられます。主語はいつも神なのです。わたしの神との出会いについては、どうぞ聞いてください。ぜひ一緒に福音を伝えることの喜びを分かち合いましょう。

賛美と感謝のうちに。

¶不自由生活の勧め

澁谷 信男

５年前に発生した熊本大震災の記憶は、皆様にはまだ生々しいことと思います。当時、乗用車で避難生活を続けていた多くの高齢者が亡くなったことを知り、私はひどく心を痛めました。せっかく震災で助かったというのに、厳しい避難生活で命を奪われたことがどうしても納得できなかったのです。以来、私の脳裏には、キャンピングカーをシェルターとして使用するアイデアが泡のように浮かんでは消えていきました。

キャンピングカー

キャンピングカー車内

悶々とする日々が続く中、コロナの発生が私に最後の決断をうながしました。高齢の身で避難所に逃げることはもはやできない。コロナ感染の危険が高

いと考えたからです。意を決して車を発注したところ、希望者が殺到して7ヶ月間待たされました。子供や孫からは、コロナで精神に変調を来したのではないかと怪しまれましたが、熟慮を重ねた結果の判断です。ようやく手に入れた車は、救急車と同じサイズのキャンピングカーです。避難生活用に、ソーラーパネルやトイレ、シャワーなど様々な備品を備え付けました。

三浦半島海岸

初めて乗る大きな車体に圧倒されながら、恐る恐る運転席に座ってみると、最近の電子機器のおかげで結構楽に運転できました。当初は災害用シェルターとして我が家の駐車場に置きっぱなしにするはずでしたが、興味半分で車に出入りしているうちに、幼い頃、自転車で走り回った冒険心が日増しに頭をもたげてきました。そして、１週間後には近場の三浦半島に弁当持参で出かけるようになりました。相模湾に浮かぶ富士山の雄姿に感動して、弁当を食べながらひねもすのたりのたりと過ごす心地よさに浸っていました。ある時は、読み残したカトリック新聞の山を車の中で読み漁り一人静かに瞑想して、穴倉修道生活を楽しんだりもしました。長い間コロナで家に閉じ込められていたため喜びもひとしおです。

一旦､火が付いた冒険心は止まるところを知らず、遂に嫌がる家内を防災訓練と称してキャンプ場に連れ出し車中泊を体験しました。狭い車内の生活は、体を動かすのも大変で路上生活者とあまり変わりません。限られた食料、限られた水や燃料で生活しなければなりません。しかし、これこそ真の防災訓練です。夫婦二人で日常生活をするのにシャワー無しで、１日当たり３０リットルの水が必要であることを初めて知りました。また、車内での煮炊きは油が飛んだり、一酸化炭素中毒の恐れがあるので電子レンジや電気調理器を使用した方が良いことに気づきました。

長野県五光牧場

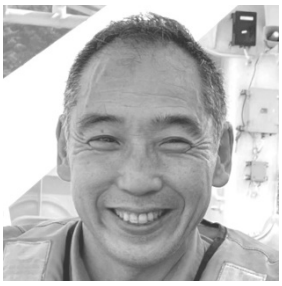
車中泊体験に成功すれば、当然のことながら遠くへ旅をしたくなります。宇宙に旅立つ宇宙飛行士の心境です。恐れおののく家内を説得しながら、高速道路のサービスエリアや道の駅で車中泊を重ね、旅をして回りました。車の中で不自由な生活を続けていると、劣悪な生活環境で被災地の泥の中を歩き回った記者時代が懐かしく思い出されます。諏訪湖一周、安曇野、白川郷、奥飛騨温泉、川根温泉とキャンピングカーは走り回ります。サービスエリアの車中泊は定期便トラックの騒音を気にしながら眠りにつきます。しかし、この経験で宅配便が翌日に届く理由がよく分かり、トラックで仮眠する運転手の皆さんに感謝の念が湧いてきます。サービスエリアのトイレは、消毒液を手にした清掃員が間断なく掃除をして回り、コロナ禍でも安心して使うことができます。コンビニに飛び込めば、いろいろな食料が調達でき調理の必要すらありません。

キャンピングカーで不自由な生活をしていると、自分がたくさんの人に支えられて生きていることを否が応でも自覚させられます。家にいると水道の蛇

口をひねりさえすれば、水はふんだんに使えます。トイレに入れば、水洗が汚物を綺麗に処理してくれます。煮炊きも当たり前にできます。

しかし、こうした便宜が多くの人の労力によって支えられていることに私たちは気づきません。都会の便利な生活に馴染んでしまうと、全てが当たり前に感じてしまいます。この便利さと当たり前が、人の暖かさ、感謝の気持ちを忘れさせてしまいます。人は不自由な境遇に置かれて、初めて自分を支えてくれる人々への感謝が芽生え、日々、この世で生かしてくださる神様のありがたみが分るような気がします。コロナ禍で不自由な生活を強いられている今こそ、生きる意味を知る格好の機会かもしれません。

¶コロナ禍の教会訪問で山手を思い出す



青木 淳

コロナ禍の中、山手教会の皆様も日々ご苦労重ねられていることと思います。私は今、様々な海域で海洋調査を行う調査船に乗っています。北から南まで、調査海域はいろいろで、調査目的に応じて様々な研究機関、大学などの研究者とともに調査を行っています。そんなわけで、山手教会にはなかなか足を運べないのですが、折々入る港で近くの教会を訪問しています。

そんな中、幸運にもお許しをいただきミサに参加させていただいた教会で、思い出深い教会をいくつかご紹介したいと思います。

鹿児島教区・ザビエル教会、新しい調査船の引き渡しのため鹿児島市内で宿泊待機中に、主日のミサに参加しました。入口で信徒会の男性。ちょうどヨゼフ会の海老名さんのような方から声をかけられ、ちょっとだけ立ち話をしてミサに出させていただきました。こちらの教会はフランシスコザビエル上陸の地ということで、近くには祈念碑もある大きな教会です。2 階にある聖堂は、山手教会のように天井が高く、光がこぼれているのが印象的でした。ミサの後、婦人会や信徒会の方々が色々と行事や課題について説明する姿は、山手教会でもよく見られた光景で、それだけでちょっと懐かしい気分です。ミサの終わりに「横浜教区から調査船で来られた青木さんをご紹介します」と突然紹介され「ありがとうございます」というのが精一杯でした・・。ミサの後は、コロナ禍なのに、お年寄りのお茶のコーナーに誘われて、鹿児島教区の成り立ちなどのお話をしてくださいました。そして、優しそうな女性信徒の方が「これ食べなさい」と大きなポンカンを 3 つもくださり。なんだかロザリオ会の皆さんを見ている気分になりました。

鹿児島教区・ザビエル教会

鹿児島教区･名瀬聖心教会､年末次期調査に向け、時間調整のために奄美大島で年越し行うことになり島の主要港である名瀬港に入港しました。

名瀬聖心教会は奄美大島の中心地の名瀬市にある教会です。奄美大島はカトリック人口も多く、たくさんのきれいな教会があります。名瀬聖心教会はその中心的な教会で、町の中心地にあり、聖堂も鹿児島県のデザイン賞に輝く素晴らしい空間で、一般市民からも親しまれています。聖堂の祭壇は、ケネディー大統領の葬儀ミサが行われた祭壇で、アメリカ・ワシントン大司教区・司教座聖堂聖マテオ教会から送られたものだそうで、アメリカ海軍の駆逐艦で運ばれたという由来があり、ヨゼフ会の岡崎さんなら経緯などをもっと知りたいと言うだろうと思えるすてきな祭壇でした。年越しの３１日の夕方訪れ

たのですが、凜とした空間にも包み込まれるような優しさがあり、長い時間お祈りも苦にならない素晴らしい空間でした。

札幌教区・釧路教会、北海道南岸の海洋資源調査が一段落ついた８月主日のミサがあることを知り、釧路教会を訪れました。ホームページでは山手教会同様、主日のミサは地区ごとに分かれて参加となっていたので、もし参加できなければ外でお祈りするつもりで伺いました。教会の入口でミサの準備をしているご婦人に声をかけると「今日は参加者も少ないですからどうぞ」と気軽に応じてくださりミサに参加しました。比較的高齢の方が多いミサで、最後に教会委員会からの連絡事項があり、雨漏りが発生しているので高額の修繕費について、臨時の信徒大会を開きたいとの説明をされていました。山手と同じように、どの教会も苦労されているのだなと、ここでも、山手の皆さんの事を思い出しました。

札幌教区・釧路教会

日本全国、特に他教区の教会にはあまり足を運ぶ機会がなかった私ですが、こうしていろいろな教会を巡る機会に恵まれ、そこで活躍されている信徒の皆さんのご苦労を見るにつけ、山手教会と山手教会の信徒の皆さん一人ひとりの顔を思い出します。そして、このコロナ禍においても全国の教会で、それぞれの取り組みで着実に足を進めている信徒の皆さんの姿を見るにつけイエス様の大きな愛を感じずにはいられませんでした。

¶コロナとマザーテレサの言葉

谷垣　惣彦

先日、オンライン会議用により良く顔を映しだせる外付けカメラを購入しました。今までは、ノートPC の内蔵カメラで自分の顔を映しだしていましたが、オンラインで顔出しが当たり前になってしまい、今更ながら性能の良いカメラを外付けしました。結果私の二重顎が目立たないよう映しだしてくれ満足しています。

あっという間に保護者会、塾の映像授業、留学代わりの海外へのオンラインプログラムなど何でもかんでも、オンラインを通して繋がるようになりました。私たち夫婦はなるべくなら高校を卒業するまで、人とのやり取りに Web を子供に使わせたくないと数年前まで本当にそう思っていました。しかしコロナ禍で仕事だけでなく、全く想定もしていなかった学校教育に至るまで自宅から参加するような時代に代わってしまいました。それにより、子供まで家の中で過ごす時間が長くなり、人との繋がりが希薄になりつつありました。コロナ禍で小学校を卒業し中学生になった子供に、「人に必要とされ、愛される人間に成長してもらいたい」という期待と、「こんな環境が続けば、相手の気持ちを思いやる想像力とか、友達との摩擦の中で学んでいく経験を持てず成長していくこと」への不安を同時に持つことが時々ありました。

私たち大人は、日常生活でオンライン上にあふれる情報を瞬時に選択し判断します。そういったありふれた情報から不正確な情報を切り離す能力は、ある程度人生経験を積まないと持てないと私は思います。しかし子供達は、そういった知識や経験を身につけることなくオンラインを使いこなさなければなりませんでした。親は Web 環境を整備し、子供のオンライン上でのやりとりが安全かどうかを把握しなければなりません。オンラインでは人との繋がりが広がるイメージがありますが、情報を取捨選択して

いくように、限られた人との繋がりのみ選択します。情報のみならず、現実社会であれば会釈する位の人間関係すら省いてしまい、効率的であるような実感すら持ちました。オンライン化により人と人との繋がりは確実に希薄になっていきました。

大人の心配とは反対に、現実には子供たちは新しい環境を受け入れる柔軟な能力がありました。私たち大人よりも心に余裕を持って、限られた学校行事や制約のある学校生活の中で友達との関りを楽しみ、以前と同じように人を心配したり繋がりを大事にしています。

最近子供への心配は不要と思い知らされたのは、子供が Web 操作に不慣れな九州に住む祖母にワクチンの Web 予約ができるように、操作方法を丁寧にわかりやすく説明していた時でした。私たち夫婦は、Web の操作方法や手続きを教えるのは、大変根気のいる作業と思って諦めていましたが、子供は人が困っているのならばできるようにしてあげたいと思っていたのでした。時代が変わりゆく中で、「娘の心配より、自分の心は大丈夫か？子供の成長を心配する前に、ソーシャルディスタンスという言葉で人との関わり合いを面倒くさいと感じ、できるだけ減らそうとして退化しているのは、自分自身ではないのか」とはっと気付かされました。

熊本県天草・崎津教会　妻の実家熊本帰省時訪問

マザーテレサの言葉に次のような文があります。「パンの飢えがあるように思いやりや愛情を求める飢えがあります。だれからも愛されず、必要とされない心の痛みです。与えてください、あなたの心が痛むほどに。」

私はコロナに負けるなと思って過ごしていましたが、私自身の敵は私であると思いました。困っている方に無関心にならぬよう、神が自分の生き方の中心となるよう、祈りを大切に神の声に耳を傾けていかなけなければならないのだと自然に言葉が心に染み渡りました。自分がすべてをコントロールしようとするのではなく、従順な心を持ち、神にゆだねることを恐れず教会に奉仕すること、大切なものを見極めるため祈りを忘れずにいたいと強く思いました。

¶ 神様のお使い（前編）

川田 耕嗣

２０２０年という年を振り返った時、多くの人がコロナウィルスによって日常生活が奪われてしまった事を思い出されると思います。けれど僕にとっては１０年間を共に過ごした愛犬アンジェロが天国に旅立ってしまった年として記憶される事になりました。そもそもは長く寝たきりになっていた父を見送り、その空白を埋める為に長年の夢であった大型犬を飼いたいと思ったのが始まりです。

犬種は現存の犬の中で最古と言われるサルーキー。中東イスラム圏の人達に飼われイスラムの神アッラーの使いと信じられ大切にされてきた犬。僕もその顔を初めて見た時からアンジェロ（天使）という名前が自然に浮かんできました。けれどそんな神様の使いも子犬の時は悪戯のし放題、その頃日常生活に支障の出始めた母と身の回りのものを破壊しまくる小悪魔に挟まれてこちらも崩壊寸前、犬を飼うなど早まったと何度思った事でしょう。

けれど小悪魔が天使に変身するのにさほど時間はかからず、成長したアンジェロは家具の破壊も卒業、別人（犬）のように穏やかになりました。又最後まで自宅で、と願っていた母も最終段階で入院しなけれ

ばなりませんでしたが、そうなる前の１年程、母とアンジェロと僕の三者で同じ空間を共有しながら静かに幸せな時を過ごしたのは何よりの思い出です。その後母は約半年間の入院の末、天国に召されましたが、その悲しみもアンジェロと共に過ごす事で何とか乗り越えられた様な気がします。

それから７年アンジェロが１０歳を迎えた昨年の８月の事です。ここの所記録を更新し続ける異常な夏の暑さ、昨年も８月を迎えた途端に一気に気温が上昇、コロナ対策と共に熱中症対策等も報道される様になりました。犬にも熱中症がある事、そして年齢を思えばもっと気をつける事は出来た筈です。でも変わらぬ様子で元気に飛び回る姿にもうすでに高齢犬になりつつあるという事実に気が付かないふりをしていたのかもしれません。

その夜いつもの様に食事を済ませエアコン下の涼しい部屋でくつろいでいた時アンジェロが突然立ちすくんだと思ったら弱々しく倒れ込んでしまいました。夜間で獣医師と連絡が取れず、とりあえずインターネットで片っ端から今の症状に当てはまりそうな箇所を読みまくりました。その結果僕の問いに対する答えの多くが犬の熱中症の症状と一致しました。エッ、そんな馬鹿な！と思う一方確かに原因として思い当たる事がありました。僕はいつも自分が寝る前にアンジェロの部屋の冷房を止めていたのです。自分の部屋の冷房を止める事は決してなかったのに・・・。

そんな状況下もう一つの事が同時進行していました。年頭に始まったコロナ騒動によって世界の日常は一変しあらゆる人、物、事が影響を受けました。宗教界も例外ではありません。山手教会も例年なら洗礼志願者の方達が、２月の志願式を経てその年の復活徹夜祭にて受洗されていた筈で、僕も山本幸子先生の講座でご一緒だった田中康裕さんの代父を務めさせて頂く事になっていました。けれどこの年は多くの行事、儀式が中止または縮小され復活徹夜祭も一般信者は参加できず、洗礼式も日程未定のまま延期されました。その後洗礼式の日取りが８月１５日に決まったと連絡を頂き、マリア様の日に洗礼が受けられるなんて素敵ですね！と田中さんご夫妻と喜びを共にしました。

ところがその聖母マリア被昇天の日を間近に控えた頃アンジェロが倒れてしまったのです。常々お世話になっている山本先生には事情を話し、代父を務める事が難しいかもしれない事をお伝えしました。幸い洗礼式当日まで小康状態が続き、お務めと同時にアンジェロの事を神様にお祈りして来ようという気持ちで教会へ向かいました。当日のミサが無事終了。お互いに祝福し合う中「ワンちゃんは元気ですか？」と声をかけて下さった方がいました。先生以外にはどなたにも話していませんでしたので、その方も何も知らずいつものようにアンジェロの様子を尋ねて下さったのです。僕はとっさに「元気ですよ！」とは答えられず、事情を説明し帰路につきました。

獣医師にはスマートフォンで撮影した動画を見せながら状況をお話ししました。そして熱中症の症状が見られる事と、このタイプの大型犬で１０歳というのは寿命のひとつの目安になるというお話を伺いました。異変が訪れたのは１７日の深夜の事です。倒れた日から僕はアンジェロの横で寝込んでいたのですが、わずかな動きに目を覚ますとそれまで聞いた事もない苦しそうな荒い呼吸を始めました。僕はどうしたら良いか判らず、唯繰り返し名前を呼びな

がら口元に水を垂らし続けました。その後２時、３時、４時と時間と呼吸を確認しながらひたすら神様、神様と口の中で唱えていました。朝の光が差し込んで来た頃、浅い眠りの中で夢と現実の境を彷徨っているような時間が続き、ハッと目を覚ました時にはもう完全に夜が明けていました。アンジェロのお腹を見ると大きく呼吸しています。僕は気を取り直して獣医師と姉の所に電話をかけました。

次号（後編）に続く

¶ヨゼフ会活動報告（７月～１０月）

新型コロナ感染防止のため、教会での活動が制限されているため、例年行事はすべて中止とし、ミサの案内や奉仕活動のみを行いました。

・１０月２日（土）：ヨゼフ会便り第４１号発行

¶ヨゼフ会活動予定（１０月～１２月）

・１１月６日（土）：帰天者のための追悼ミサ（予定）

昨年１０月から今年９月までに帰天された方の追悼ミサをロザリオ会と共同で捧げます。

・１２月２４日（金）：降誕祭ミサ奉仕（予定）

ミサの会場、参加人数などは未定ですが、会場の準備、案内、片付け等の奉仕を行う予定です。

・１２月２４日（金）：ヨゼフ会便り第４２号発行予定

新型コロナの感染状況により教会活動が制限されている間は、引き続きヨゼフ会活動は休止いたします。活動再開が決定次第、改めてご案内いたします。

¶会員消息

６月１５日から９月１４日までに次の方々が帰天されました。永遠の安息をお祈りいたします。

帰天日	洗礼名	氏　名	享年
2021/08/14	シモン	大久保 宏昭様	７３歳
2021/08/30	ペトロ	中城 芳裕様	６３歳

¶編集後記

「９月は幻の海」・・・この数年、いやもっと前からかもしれないけれど、肌で感じる気温、湿度、空気感、見上げると漂う空と雲、吹く風と強い雨・弱い雨そして光と影、すべてがずいぶん昔から比べると少しずつ時間軸を中心にずれてきているように思う。

早まるのもあるけれど、どちらかというと多くは五感に感じる季節感が遅くなってきている気がする。

その分、春と秋は前よりも一層短く感じる。まだ続くコロナ禍、もうすぐ地域によっては紅葉の季節、山々は初冠雪を迎える。冬の到来が早いのは不変で人々はこの一年を無事終えるための準備を始める。

半世紀前近く前の９月、高校卒業後男子同級生だったＫから、横須賀線のある駅に終電で下車、パンと水を持ち夜通し歩き続けて辿り着く夜明けの海をどうしても見たいと誘われ同行することになった。

下車した駅がどこだったか、なぜか思い出せない。ただでさえ駅前とわずかな家並みの光がなくなるとあとはＫが持っている懐中電灯と地図だけが頼り。

Ｋがなぜそのようなプランを立てたのか得てして聞かなかった。その当時の９月といえば夏休みが終わり学校も始まり、街の風景も行き交う人々の装いも変わる季節。海のイメージでいうと、もう海の家や花火大会の跡形もなく人は疎らで海鳴りだけが聞こえる。祭りのあとのような、たとえば一息ついた男女の微妙な心の動きが感じられる季節でもあった。

何時間歩いたのだろう。明け方にＫの希望どおり海に辿り着いた。その帰り道の朝８時すぎ奇妙な出来事に遭遇した。当時では珍しいコンビニの開店祝いのような人は誰も見当らないのに多くの上着、バック、財布までが机、椅子に無造作に置かれ、遠くに声だけが聞こえるエアポケットに入り込んだようだった。あの９月の海は幻だったのか。後になり、中島みゆき「船を出すのなら９月」を何回も聴いた。

中秋の名月を経て１０月は信徒参加ミサが再開される。年内あと三ヶ月。私達はきっと今年の帳尻を合わせられると信じたい。祈りのうちに。（坪井暢）